

風

春彦は、自宅の自分の部屋で、アルバイトで得た資金で買ったスマホを手にしていて、そしてラインをタップし美咲宛メールを返信した。

川を渡る風が美咲の長くしなやかな黒髪を揺らした。美咲は、流れる時に陶醉したかのように立ち尽くし、輝く川面を見つめていた。春彦は、美咲の傍らで両膝を抱え座り込み、せせらぎに耳を傾けていた。二人の会話は途切れたままだった。

「……美咲、そろそろ帰ろうか？」

「嫌！ まだここにいる」

美咲はいたずらっぽい笑みを浮かべ首を横に振った。

春彦は傍らの小石を拾い上げ立ち上がると、サイドスローのフォームから川面に石を滑らせた。平べったい丸い石は、少しの間水面と平行に飛び、水面を数回飛び跳ね、波紋を残し川の中に消えていった。

美咲が「春彦が誘ったのよ」と呟いた。そして、ひとり河川敷にある公園へ向かって歩き始めた。春彦は「美咲が先にメールを寄こしたんじゃないかねえか」と不服そうに呟き美咲の後を追った。

ふたりはそれぞれの自転車を公園の駐輪場に止めていた。利根川の紫陽花の咲き乱れる河川敷の公園は、所々に大小の岩を配し、川の水を引き込んだ造形で、訪れた人に溪流をイメージさせる。

公園の隅で、幼い女の子と幼い男の子がシャボン玉を吹いて遊んでいた。ストローの先から次から次へと現れる透明な玉は、すぐ弾けて消えてしまうが、いくつかは太陽光を反射しながら光る玉となって、風に吹かれ空中を浮遊した。

美咲は、笑いながら溪流を飛び越え、踊るように光る玉を追いかけた。両手を伸ばし光の玉を包み込もうとするがうまくいかない。美咲は岩に駆け上り手を伸ばしたが、指先で大きな光の玉が弾けた。

「ガキみたいなまねするな！」と春彦が怒鳴った。

「大女優になるわよー」

高校の演劇部に所属し将来女優になることを夢見ている美咲は、岩の上で青空を見上げ、両手を広げ叫んだ。それに呼応するかのように幼児たちから歓声が上がった。美咲は岩の上から春彦を見下ろし微笑んだ。だが春彦は無言のまま目をそらせた。美咲の夢をシャボン玉のように儂いものと感じたからだ。

美咲と春彦は、咲き乱れた紫陽花とシャボン玉を横目で見ながら公園を出て、自転車を押しながら川沿いの遊歩道を並んで歩いた。ふたりとも高校の制服のままだった。美咲は白い半袖ブラウスに紺のスカートを穿き、春彦は白い半袖シャツに黒のズボンを穿いていた。

梅雨はまだ明けてはいなかった。「梅雨明け宣言」はまだ発せられていない。確かに昨日の空は暗く低く雨の匂いがした。だが今日の空は違った。今日の空は限りなく高く雲ひとつなく隅々まで晴れ渡っていた。

利根川は、梅雨時の雨で膨大な量の水を蓄え、大河の風情をもってゆっくりと流れていた。

突然、川を渡る強い風が二人に襲いかかった。美咲は「あっ！」と言って慌ててスカートを片手で押さえた。そして春彦を睨むと無言のまま自転車に飛び乗り走り去った。

その夜、春彦は美咲の夢をみた。

夜の岸辺に無言で佇む美咲が、片手にうちわを持ち、手招きをしている。何故か四方の闇から彼女にスポットライトが当たっている。美咲は白地に緋模様の花柄を鏤めた浴衣を着ていた。他に人はなく、せせらぎだけが耳に響いた。春彦は川をバックに無言で手招きをする美咲に近づこうとした。だが足が思うように動かなかった。両足が石のように重い。苛立った彼は、腰を屈め小石を拾うと、それを美咲の頭越しに川へ投げ入れた。すると突然美咲の背後から無数の光る玉が湧き上がった。それは、風に運ばれ、美咲を中心に夜の闇に広がっていった。風に煽られ、光る玉のひとつが春彦の肩を掠めた。よく見ると、それはシャボン玉であった。美咲はシャボン玉をうちわで打ち払おうと動き回った。その所作は舞を舞うようであった。美咲が一瞬バランスを崩した。そして浴衣の裾が乱れ彼女の白い太股が露わになった。

美咲と春彦は幼馴染みで、前橋市の閑静な住宅街に住んでいる。家も近い。通う高校は異なるが、ふたりは三年生で来春に受験を控えている。美咲の家は裕福で彼女には女優になるという壮大な夢がある。春彦の家は貧しく彼には具体的な夢がない。春彦が受験に失敗すれば、浪人は許されず、市の郊外で機械の部品工場を営んでいる父親の下で働くか、あるいはどこか中小企業でも探して就職するしかない。だが春彦としては、受験勉強に集中するより、コンビニのアルバイトを続けたいと考えていた。春彦は、小遣い稼ぎも理由の一つだが、謹厳実直な両親よりも、虚心坦懐に彼を受け入れてくれるオーナー兼店長が好きだったからだ。

父も母も春彦に「バイトなど止めて勉強しろ」と口うるさく言う。両親が春彦に学歴を付けさせようとする気持ちは彼にも分かる。両親には学歴がなく、そのためこれまで何かと苦労してきたからだ。春彦も学歴の重要性は理解している。ただ彼にはその先がない。両親は良い大学を出さえすれば自ずと道も開けると言うが……。

……G大学の教育学部でも受けてみるか。家から近いし公立なので金も私立ほどは掛からない。そして教員資格を得て教師にでもなるか。美咲とは離ればなれになるが……。

さんざん迷ったあげく春彦は、地元G大学の教育学部を受験すると決めた。

7月上旬の夜、春彦は美咲と連れだって七夕祭りに行った。蒸し暑い夜であった。だが繁華街は、浴衣を着た親子連れや若いグループ、カップルたちで溢れていた。春彦はTシャツにジーンズ姿であったが、美咲は浴衣を着ていた。但し夢に出て来た白地の緋ではな

かった。紺地の紺であった。浴衣はやや地味な印象を受けたが、髪を上げ厚めの化粧をした美咲は、妖艶な雰囲気醸し出していた。

七夕祭りの夜を何度美咲とこうして過ごしたことだろう。春彦は屋台や露店を巡りながら、でもこれがおそらく美咲と過ごす最後の七夕の夜になるだろう、と思った。

来春、高校を卒業すれば、ふたりはそれぞれの道を歩むことになる。美咲は東京で暮らし、俺はこの地に留まる。東京と前橋、それほど遠い距離ではないが、互いの生活空間の中で互いの不在が長くなれば、時間を共有したいと思うこともなくなるだろう。その後、美咲と俺の人生は交差することなく、互いの存在は、やがて互いの心の中で精彩を欠き、記憶の断片と化していくだろう。

「どうしたの春彦？」

黙って美咲を見つめる春彦に、美咲が不審そうに首を傾げた。

百貨店の駐車場に舞台がセットされ、ソングフェスタが開かれていた。

～♪～ You'd be so nice to come home to,

You'd be so nice by the fire ～♪～

白いTシャツに濃紺のパンツスーツを合わせた女性シンガーが、ドラムを叩きながらジャズの名曲を歌っていた。

美咲は「素敵ね、歌っている人も曲も」と言うと、さりげなく春彦の手を取り自分の指を絡めてきた。

少し疲れたので、ふたりは座る場所を探し、甘味処の店先の縁台に並んで腰を下ろした。

金魚の入ったビニール袋を下げた小さな男の子と、綿菓子を手にした小さな女の子が、ふざけ合いながらふたりの前を通り過ぎた。男の子が女の子の綿菓子を取り上げようとしていた。春彦は幼児たちを目で追いながら、過ぎ去った美咲との日々を漠然と思い返した。「つままないなァ、春彦が東京に来ないなんて。わたし春彦と東京で……」

美咲はそう言いかけて下を向いた。美咲も、春彦と同様、やがて訪れるふたりの別れを予感していた。美咲の目からは涙がこぼれ、その涙は膝の上に組んだ彼女の手の甲を濡らした。

雷鳴が響いた。人の動きが慌ただしくなった。春彦は美咲の肩を抱き強く引き寄せた。

店の軒下に吊してある風鈴が風に煽られ、暑い夏の到来を告げた。

春彦はバイトを7月で打ち切った。コンビニのオーナー兼店長は、バイト料に加え少額ではあるが餞別を春彦に渡した。それ以降春彦は受験勉強に集中し美咲とも会わなかった。スマホでのたわいもないやりとりは交わしていたが。

暑い夏が終わり二学期が始まった。

9月初旬の日曜日、春彦は美咲とドライブに出かけた。美咲の運転で、彼女の車で。厳密に言えば美咲の母親のオーディオA4で。

美咲は「女優になるためには車の免許も必要よ」とわがままを通し両親を根負けさせた。6月に誕生日を迎え18歳になった美咲は、夏休み中に教習所に通い、普通免許を取得し

た。春彦には、教習所に通っていることは伏せていた。

「知らなかった、美咲が免許、取ったなんて」

「驚いたでしょう、春彦」

グレイのジャケットに細身の黒いパンツ姿で運転席に座る美咲が、レイバンのサングラスを少し下げ、茶目っ気たっぷりに舌を出した。春彦は、助手席に乗り込むと、「まさかトップモデルのような女優から、ドライブに誘われるとは夢にも思わなかった」と返した。春彦は、紺のジャケットに綿パン、精一杯のおしゃれをしてきたつもりだ。美咲は「行きますよ、行きましょう」と言って微笑み、アクセルを踏み込んだ。

前橋から高速経由で軽井沢までそれほど時間はかからなかった。高速を制限速度を超えるかなりのスピードで飛ばしてきたせいもあるが、あっと言う間に着いた。

美咲は森の中にひっそり佇むホテルの駐車場に車を止めた。ふたりはホテルの近くを散策した。秋の日差しを受けた木立は、明暗がはっきりとして、写実派の絵画のように目を引いた。また、木立を抜けてくる微風は凜として肌に心地よかった。

散策に飽きるとふたりは、ホテルのエントランスから一階のロビーを抜けて、瀟洒なレストランに入った。昼食にはまだ早い時間帯で他に客はなく、ふたりは窓際の席を確保した。美咲がメニューを確認しながら「ランチにはまだ早いかしら？」とウエイターに訊くと、パスタならすぐ用意できるとのことだったので、彼女はパスタとコーヒーを注文した。春彦も美咲に倣った。

窓は開け放たれていて、窓の向こう側はオープンテラスになっていた。

「俺たちが付き合うこと、美咲の両親、何も言わないか？」

運ばれてきたパスタを食べながら春彦が尋ねた。

「……ママがちょっとね。……突然何よ？」

美咲が躊躇いがちに答えた。

「美咲を一流大学へ進学させ、将来エリートと結婚させ、幸福な家庭を築かせる。自分と同じようにね。それがママの考えだ。その考えを妨害する者、妨害する可能性のある者は、予め美咲の周りから排除しておかなければならない」

「何それ？ 私は女優になるのよ」

「何それって、ごく一般的な親の論理さ。女優になるという娘の夢は、言わば熱病みたいなものだ。娘の夢は何れ現実の壁の前で崩れる。娘はごく普通の人生を歩むようになる。俺のようなつまらない人間と大切に育てた娘をいつまでも付き合わせておくわけにはいかない。俺が美咲の親ならそう考えるね」

「ひどい！ 春彦、ひどい！ 今日は変よ。わたし、こんな話をするためにあなたを誘ったんじゃないのよ」

美咲の荒げた声にウエイターが驚きふたりに視線を向けた。

春彦は少し苛立っていた。

あと半年もすれば美咲とはそう簡単に会えなくなる。時間と距離だけの問題ではない。美咲と俺とでは家柄が違う。何れ美咲は俺から離れ、俺の手の届かない所へ行ってしまう。

春彦は目を伏せた。

ふたりの間に長い沈黙が流れた。

「春彦、離れていてもいつも一緒だよ。こうして……」

美咲はフォークとナイフを皿に置き、目を伏せたまま黙り込んで食べ続ける春彦の右手を押さえた。

11月下旬、春彦の父親が死んだ。会社経営に行き詰まった末の自死であった。

母の話では、会社は決算上ずっと黒字を維持してきたが、取引先からの度重なるコストダウンの要請で年々売上が減少し、最近では資金繰りに窮することもあったという。

「それにしても吊り橋から溪流に飛び込むなんて」と、東京から駆けつけてきた叔父が言った。

葬儀告別式は、叔父の采配の下、近親者のみで執り行った。

告別式の後、「受付から聞いたが、女子高生が記帳も焼香もせず、数珠をさげたままずっと表に立ってたらしいぜ。春彦の友達かな？」と、叔父が春彦に訊いた。春彦はハッとした。だが思わず首を横に振っていた。

会社は取引先と叔父の支援により苦境を乗り切った。新社長には取引先からの出向者が着任し、ずっと父とともに会社を担ってきた母は、代表権のない取締役としてその下に就いた。従業員たちは首切りを免れそのまま残留した。

母は、葬儀以降、折に触れ春彦に「お金の心配はいらないのよ。だから受験に集中して。そして必ず合格して大学に入って。それがお父さんの願いなのよ」と諭した。

1月初旬、美咲は受験のため東京へ旅立った。春彦は駅のホームで彼女を見送った。別れ際美咲は春彦に封書を一通渡した。「何これ？」と問うと、彼女は春彦を引き寄せ彼の耳元で「Love Letter」と囁いた。そして笑顔で電車に乗り込んだ。春彦はホームで、美咲の乗った電車の後を、車両が見えなくなるまで目で追った。

春彦は、美咲から受け取った封書をレザージャケットの内ポケットに入れ、駅を出ると家路を急いだ。

駅前の通りは榎並木であった。春彦は信号待ちで榎を見上げた。榎は葉を落としていた。それでもその大きな榎を揺らすかのように強い北風が吹いていた。乾いた風が吹いていた。